

西区の浜寺公園周辺は、古くから白砂青松の地として知られてきた。「万葉集」をはじめ平安時代の歌題にも数多くみられ、紀貫之は「おきつなみたかしのはまのはままつのなにこそ君をまちつわたれり」（「古今集」と詠むなど、松林の連なる風光明媚な場所であった。

「浜寺」という地名は、14 世紀にまでさかのぼることができる。かつて大雄寺という大寺院があり、「浜の寺」という通称で呼ばれていたことから地名になったといわれる。

明治時代になると、その松林が伐採の危機にさらされることとなるが、明治 6 年(1873)に大久保利通が訪れた際に、歴史に名高い松林の伐採を嘆き、松林の保存を説いたことから、公園が開設されることとなる。この公園が、近代公園制度のはじめとなる、明治 6 年(1873)の太政官布達第 16 号「群衆遊観の場所に公園を設ける件」にもとづくもので、日本最初の都市公園の 1 つとして浜寺公園が開設された。

その際に大久保利通の詠んだ歌「おとにきく高師の浜の浜松も世のあだ波はのがれざりけり」は、後に大阪府知事西村捨三の手によって石碑に刻まれ、現在も「惜松碑」として浜寺公園の入口に置かれている。この歌は「音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや袖

の ぬれもこそすれ」（『小倉百人一首』祐子内親王家紀伊(72 番)『金葉集』）になぞられたという。



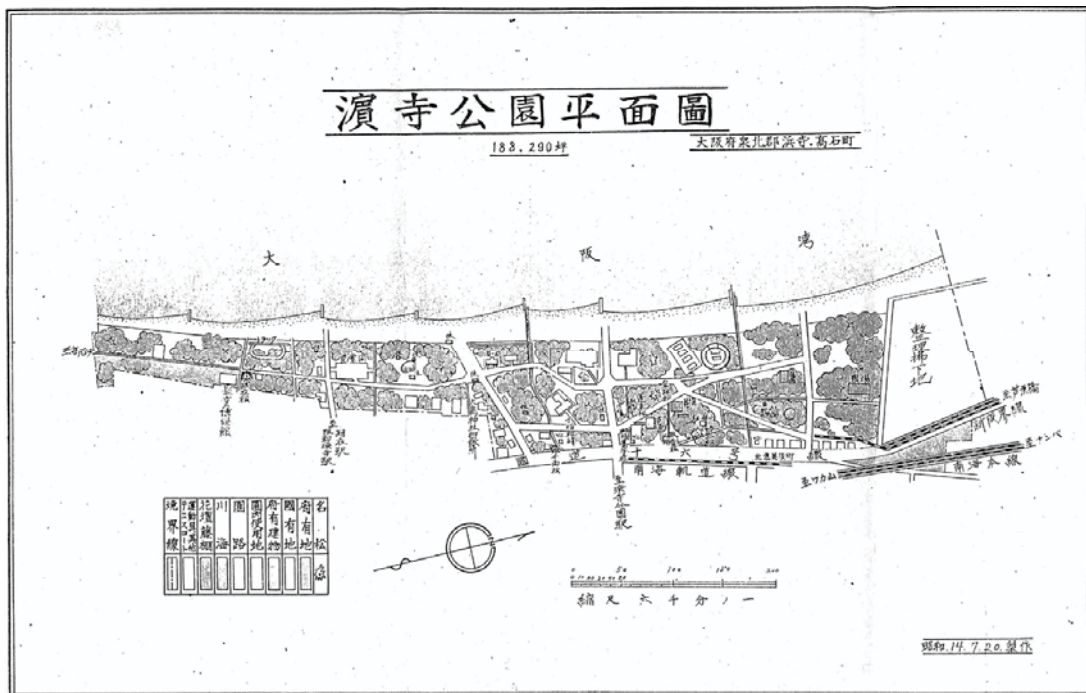
浜寺公園の松林



惜松碑



浜寺公園の様子



濱寺公園平面図(昭和 14 年(1939)) (濱寺公園誌)

明治 30 年(1897)には大阪と和歌山を結ぶ南海鉄道が開通し、大阪や堺からのアクセスが容易な保養地となって発展する。明治 38 年(1905)には南海鉄道により海水浴場が設置され、翌年からは大阪毎日新聞も運営に関わり、多くの人々で賑うこととなる。



浜寺公園 音楽堂付近
(都市絵はがき 1 なにわの新名所)



浜寺テント村
(都市絵はがき 1 なにわの新名所)

南海鉄道旅客案内
 10月10日、石津の方は九月十日、又同村の北の端の東の方に小山が
 あり、松樹二三本を栽て、小庵を結んだところがあり、之と乳の
 園と云ひます。其處は石津連の庭野見宿禰の墓、是より元の濱村に
 つの傳へがあります。定かではありません。又石津の濱村に、今ふた
 より、濱村は石津の(堂)三拾町。此石津は舊石津の村に、今上
 石津村と成て、土佐日記に、石津といふところの松原もある
 くて濱村と成て、とあり、石津日記に、列島の此の海に、松原が
 つて、又更利日記には、この海で、錨を抛り、この松原に、今上
 してあります。此く、濱村の村に、この海で、錨を抛り、この松原に、
 今文野の遊今夏のやうに思はれますから、因に一寸、を、濱村に、
 します。此に

濱寺停車場
 濱寺の停車場、今尚高石の名があります。高石、濱寺の二村に分れて、
 濱の舊跡で、今尚高石の名があります。高石、濱寺の二村に分れて、
 石は人口三千五百四拾三人、戸數五百九拾四戸、濱寺は三千八百〇九人
 戸數七百一十、高石には明治三年、戸數五百九拾四戸、濱寺は三千八百〇九人
 戸數七百一十、高石には明治三年、戸數五百九拾四戸、濱寺は三千八百〇九人
 戸數七百一十、高石には明治三年、戸數五百九拾四戸、濱寺は三千八百〇九人
 戸數七百一十、高石には明治三年、戸數五百九拾四戸、濱寺は三千八百〇九人

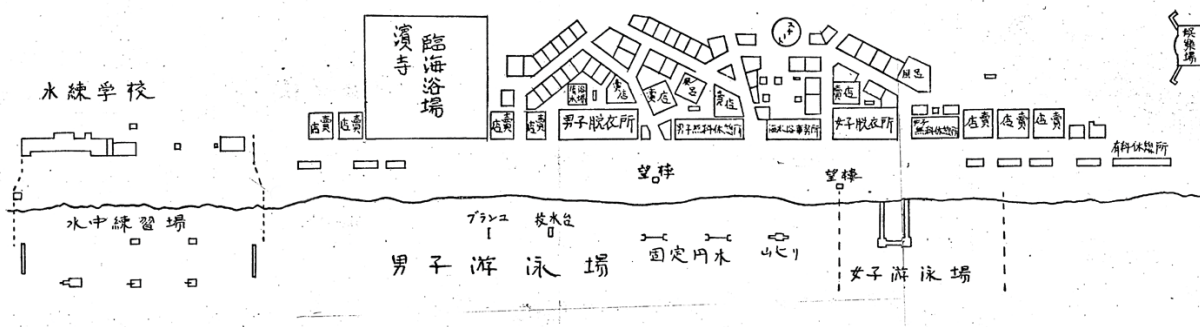
濱寺公園
 濱寺公園は、廣大、北二十町、東十町、此公園の所在地
 濱寺と稱する。濱寺の舊迹故です。濱寺は元享年中三光園の開創
 寺、寺と大雄寺と稱する。濱寺の舊迹故です。濱寺は元享年中三光園の開創
 寺、寺と大雄寺と稱する。濱寺の舊迹故です。濱寺は元享年中三光園の開創
 寺、寺と大雄寺と稱する。濱寺の舊迹故です。濱寺は元享年中三光園の開創



濱寺海水浴場入口
(都市絵はがき 1 なにわの新名所)

「南海鉄道旅客案内」

濱寺海水浴場配置図



濱寺海水浴場配置図(大正 15 年(1926)) (濱寺海水浴場二十周年史)

浜寺公園の入口に位置する明治 40 年(1909)建築の南海電気鉄道「浜寺公園駅駅舎」(登録有形文化財)は、明治期の日本を代表する建築家である辰野金吾が主宰した辰野片岡事務所の設計による。木造、平屋建てのハーフティンバー様式の美しい駅舎は、浜寺公園・海水浴場などの海浜リゾート地の玄関口として、またかつての別荘地としての系譜を有する高級住宅地の玄関口として、浜寺地域の変遷と歴史を見守ってきた。

また大阪寄りには大正 8 年(1919)建築の南海電気鉄道「諏訪ノ森駅西駅舎」(登録有形文化財)がある。

木造平屋建ての 48 平方メートル程の小規模な駅舎で、入口上方の明かり取り窓には、浜寺から淡路島にむかっの海岸の様子が描かれたステンドグラスが 5 枚はめこまれ、この駅舎の特徴となっている。

堺区の大浜公園は、幕末に外国船の入港を防御する目的として御台場が築造され、明治に入り公園として整備された場所である。明治 21 年(1888)に阪堺鉄道が開通し、明治 36 年(1903)には第 5 回内国勸業博覧会の会場の一つとなった。公園内には水族館・公会堂などのレジャー施設が整備され、多くの人々でにぎわった。大正 2 年(1913)には、辰野片岡事務所設計によるコテージ風の大浜潮湯が開業し、隣接する公会堂では、少女歌劇なども上演されていた。日本初の全国学生相撲大会も大正 8 年(1919)に開催され、その学生相撲のメッカであった名残を残す大浜相撲場や、博覧会同時に建設されたものを復元した龍女神像など、かつての大阪都市圏を代表する海浜行楽地の名残を感じさせるものが今も周辺に点在する。また公園周辺では、潮湯の伝統を引き継ぐ公衆浴場が現在も営業を続けている。

さらに大浜公園の北側には旧堺燈台が建つ。堺旧港の突端に位置する旧堺燈台は、明治 10 年(1877)に建築された建物で、建築当初の場所に現存する木造洋式燈台としては、わが国で最も古いもののひとつとして、昭和 47 年(1972)に国の史跡に指定されている。建築にあたっては、土台の石積みは旧堺港の港湾整備と併せて備前国(現在の岡山県)出身の石工・継国真吉が携わり、建築工事については、堺在住の大工・大眉佐太郎が行った。また灯部の点灯機械の取り付けは、横浜の燈台寮よりフランスのバービエール社の機器の購入を行い、英国人技師ビグルストーンが携わった。建築費は 2,125



南海電気鉄道 浜寺公園駅



かつての浜寺公園駅(年代不詳)



大浜公園(水族館跡地)



かつての大浜潮湯
(大阪府の近代化遺産)



堺名所(大浜公園)
(堺市博物館「堺と三都」)

円、点灯機械の購入には約 360 円を要している。それらの建築資金は、堺市民（当時は堺県）の寄付と堺県からの補助金によりまかなわれた。

その後約 1 世紀の間、大阪湾を照らしつづけたが、周辺の埋め立て等により、昭和 43 年(1968)にはその灯りを消すことになった。近年老朽化が著しかったため、平成 13 年(2001)度から 19 年(2007)度まで実施した保存修理工事に伴う調査により建築過程が判明したため、明治 36 年(1903)頃の姿への復原整備が実施された。近年は、7 月に一般公開を行い、2 日間の公開で約 1,000 人が訪れる。また灯台の周辺では、親水環境の整備により、散歩やランニングなどを楽しむ人々の姿が多くみられる。

与謝野晶子にとっても海浜部の思い出は深いものがあり、明治 38 年(1905)「海こひし潮の遠鳴りかぞへつつ 少女となりし父母の家」(『明星』)とふるさと堺を懐かしむ歌としてうたっている。海と共に歩んできた堺のまちの海浜部は、古くは風光明媚な場所として、そして明治以降は人々の行楽の場として親しまれ、今も多くの人々の集いの場、憩いの場として賑っている。



絵葉書「堺大濱蛤取り」



旧堺燈台